

論文の内容の要旨

論文提出者氏名	深澤歩
論文審査担当者	主査 石塚修 副査 塩沢丹里・小泉知展
論文題目	Predictive Factors for Deterioration of Lower Urinary Tract Symptoms After Iodine-125 Brachytherapy in Prostate Cancer Patients (前立腺癌に対する密封小線源永久挿入療法における下部尿路症状増悪因子の検討)
(論文の内容の要旨)	<p>〔背景と目的〕 密封小線源永久挿入療法は限局性前立腺癌に対して有効な治療法であり、手術と比較して性機能温存率が高く、外照射と比較して治療期間が短いという利点がある。しかし、急性期に尿路合併症が高率に生じる点が問題であり、現時点においてこの合併症を予測する方法は確立されていない。今回、前立腺癌に対する密封小線源永久挿入療法における、急性期下部尿路症状(lower urinary tract symptoms, LUTS)の増悪予測因子を検討した。</p> <p>〔対象と方法〕 2013年1月から2014年10月の間に¹²⁵I小線源単独療法が行われた限局性前立腺癌患者42例を対象とした。処方線量は全患者において160 Gyであった。小線源療法前および3か月後に国際前立腺症状スコア(International Prostate Symptom Score, IPSS)を用いてLUTSを調査した。IPSSにおける12点以上の増加を明らかなLUTSの増悪(obvious deterioration of LUTS, ODL)と定義し、ODL発生と以下に挙げる因子との関係を解析した；年齢、線源の総放射能、前立腺体積、線量体積ヒストグラムにおけるパラメータである前立腺V 150 (cc, %)および尿道D 30 (Gy)。</p> <p>〔結果〕 17例(40.5%)においてODLが発生していた。単変量解析では前立腺V 150 (%)および前立腺V 150 (cc)とODL発生間にそれぞれ有意な相関関係を認めた。多変量解析では前立腺V 150 (cc)とODL発生間のみに有意な相関関係を認めた($P = 0.039$)。</p> <p>〔結論〕 前立腺V 150 (cc)は、限局性前立腺癌に対する¹²⁵I小線源療法におけるLUTS増悪の予測因子であると考えられる。治療計画の際には、前立腺V 150 (cc)を可及的に低減させる必要があると考えられる。</p>